

第22図 円護寺7号墳 出土遺物実測図



第23図 円護寺7号墳 表土中出土遺物拓影

#### 4 円護寺8号墳 (第24~33図、図版10~13・22・23)

##### 位置と現状

丘陵先端部の標高59~62mに築かれている。東側には40号墳が隣接し、さらに一段上がった高位置には41、42号墳が位置している。

調査前の観察では、南側の一部に流失の痕跡が認められたが、尾根の上位側には周溝とみられる凹みが認められ、墳丘も西裾から2m以上しっかりした高さが観察された。墳頂部の遺存状況も比較的良好であったが、東側に張り出す不整形な平坦部が見られた。当初はこの突出部について、崩落土の堆積と考えていたが、調査を進めていく中で小規模な古墳(40号墳)が築かれていることが明らかとなった。

##### 墳丘

墳丘面は厚さ5~20cm前後の表土下で検出された。墳頂部の標高は61.9m内外を測る。墳丘規模は南北径11.5m、東西径11.0mで、墳丘の高さは西裾部から3.2m、東側周溝底から最大1.1mを測る。墳形は真円に近い円墳である。

墳丘の築造は、尾根の上位側を廻る周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝は墳丘をほぼ半周し、西側はわずかな地山の削り出しによって墳裾部を造りだしている。周溝の幅は南側で1.2m、深さ50cmあまりである。盛土は墳頂部の西側でもっとも高く、厚さ1.5mが確認された。第26図にみる22層の褐色粘質土が古墳築造前の表土とみられ、その上層に置かれている2~21、23、25~27、30、31、33、37、39~61層などが盛土と考えられる。緩斜面に大量の盛土を行うことによって墳丘を築いている様子がうかがわれる。

##### 埋葬施設

主体部は、墳頂部ほぼ中央から墓壙2基(第1、2主体部)が検出された。ともに同一方向の主軸を持ち、第1主体部の南東1.6mに第2主体部が位置している。主体部はいずれも盛土内に造られている。

##### 第1主体部 (第27図、図版11・12・22・23)

主軸をN-16°-Wにとり、尾根の稜線にはほぼ直交している。平面形は隅丸長方形に近く、上面の検出規模は長さ277cm、幅74cm、深さ51cmを測る。底面はおおむね平坦であるが、南側から北側に向かってわずかに傾斜している。底面の長さ225cm、幅38~46cmを測り、南側で幅を増している。

埋葬形態は、墓壙埋土の状況と遺物の出土位置や出土状態から判断して、被葬者を直接墓壙内に埋葬していた可能性が考えられる。

遺物は、須恵器蓋杯の蓋(第29図1)、杯身(2)、鉄刀(3)、刀子(4)、鉄鎌(第29・30図5~12)が出土した。

須恵器蓋杯(1)、(2)は墓壙底の南側に位置し、口縁部を底面に接し並列する状態で検出された。出土位置や出土状況から枕として転用されていたものと思われる。鉄刀(3)は蓋杯(1)、(2)のすぐ西よりにあり、墓壙壁際に沿う状態で出土している。切先を北側に向け、刃部は墓壙中央側にある。全長102.6cm、刀身中央部の幅3.7cmを測る大刀である。鉄鎌は墓壙底の北隅に集中し、広根鎌の(5~7)と、長頭鎌の(8~11)がそれぞれにまとまって検出された。(12)は無茎鎌で長頭鎌の近くで出土している。(5~11)にはいずれにも茎部に木質痕が残り、その上端に横方向の巻詰め痕が観察された。また、無茎鎌(12)には鎌身中央部の両面に装着時の木質痕が残っている。

#### 第2主体部(第28図、図版12・13・23)

第1主体部の南東1.6mに位置し、主軸は第1主体部と同一のN-16°-Wである。平面形は隅丸長方形を呈し、上面での検出長207cm、幅97cmを測る。底面はおおむね平坦に整えられており、長さ179cm、幅は46~50cmである。底面の幅は南側でわずかに広くなっている。墓壙の深さは69cmあまりを測る。

埋葬方法は、墓壙の埋土状況に棺の痕跡がみられないことなどから、第1主体部と同様に墓壙内に被葬者を直葬していたものと思われる。

遺物は、刀子(第31図13)、鉄鎌(14、15)、不明鉄製品(16、17)が出土した。刀子(13)は南側の壁際に位置し、墓壙底から10cm程度浮く状態で出土した。不明鉄製品(16、17)は刀子の北どなりで検出されている。鉄鎌(14、15)は中央の西壁よりに位置し、(14)は墓壙底に接し、(15)は3cmあまり浮いて出土している。

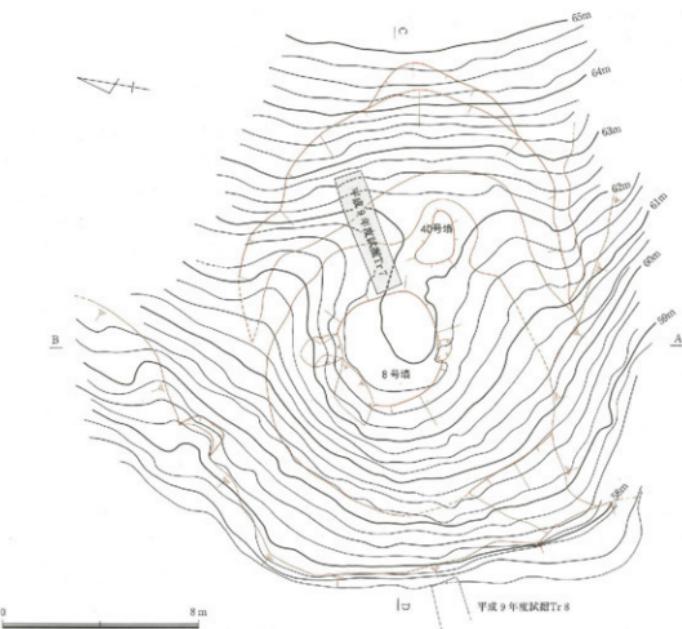
(13)は茎端部をわずかに欠く。残存長11.2cm、刃部8.3cmを測る。(14)は柳葉形の鎌身部を持つ。逆刺と茎端部を欠き、残存長は13.95cmである。(15)は三角形の鎌身部を持つ長頭鎌で全長15.70cmを測る。(14)、(15)ともに茎部に木質痕が残り、その上端に横方向の巻詰め痕が観察された。不明鉄製品とした(16、17)は、それぞれ残存長4.50cm、3.60cmを測る。板状にたたきのばしたものを円錐状に巻き接ぎ合わせている。上端部はおおむね円形をなして径1.0cm~1.2cmを測り、尖端側はいずれも断面方形状を呈している。

#### その他の出土遺物

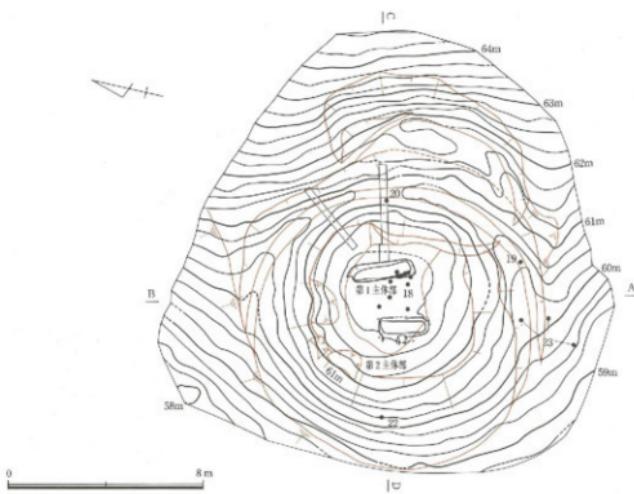
墳頂部から須恵器壺(第32図18)、周溝内から土師器高杯(19)と土師器把手付椀(20)、盛土中から土師器高杯(21)、表土中で土師器脚部(22)と須恵器杯蓋(23)が出土した。須恵器壺(18)は墳頂部のほぼ中央から破片状態で検出されており、破碎され置かれていた可能性が考えられる遺物である。(19)、(20)はいずれも赤彩され、それぞれは南側と東側の周溝内から検出された。土師器把手付椀(20)はほぼ完形品で原位置を保っているものとみられる。高杯(21)は墳丘東側の盛土下層から検出され、墳丘築造時の遺物の可能性が考えられる。

#### その他の遺構(第33図)

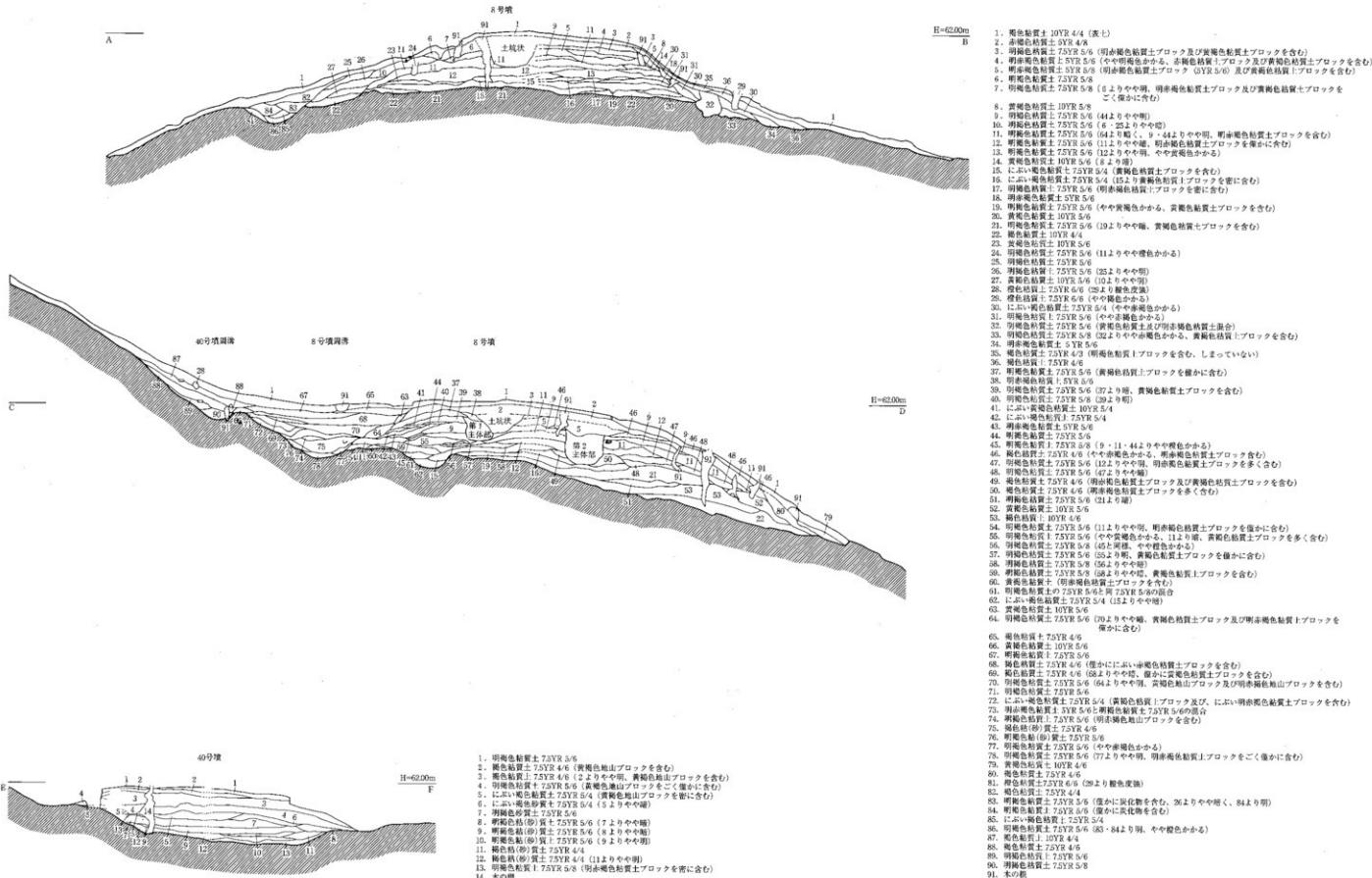
墳丘盛土の下位で溝状遺構を検出した。溝は、東側墳丘裾部から墳丘中央側へ0.9~1.4mに位置し、墳裾ラインには沿った状態で湾曲に掘られている。溝の両端部を検出することができなかつたが、溝のすぐ西側で観察した南北墳丘断面(第26図A~B)にその痕跡が表れないことから、この断面位置まで延びることはないと思われる。溝の幅は1.0m前後、深さは最大30cmを測り、両端に向かって除々に浅くなっている。断面はU字形を呈し、墳丘断面図(第26図C~D)の62層が溝の埋土である。溝の性格ははっきりしないが、墳丘裾部に沿う状況が見られることから、古墳築造に係る溝の可能性も考えられる。遺物は検出されなかった。



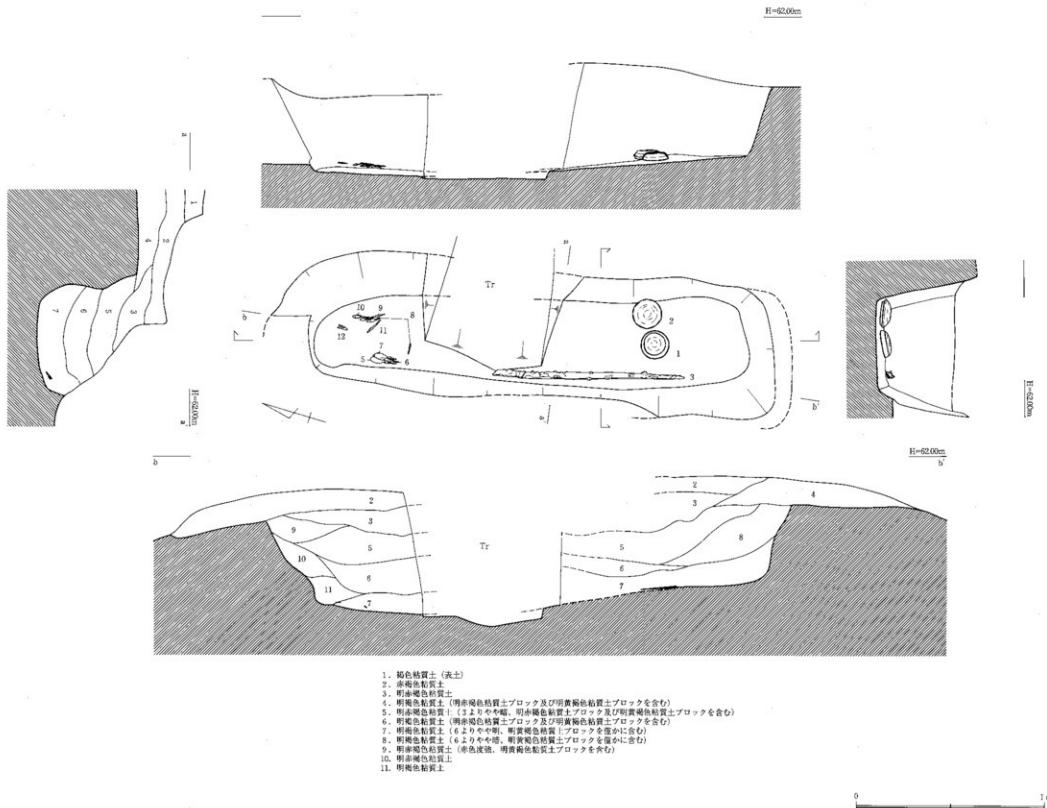
第24図 円護寺8・40号墳 地形測定図



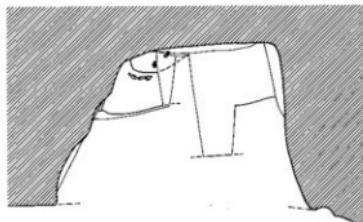
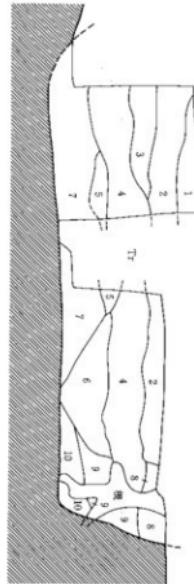
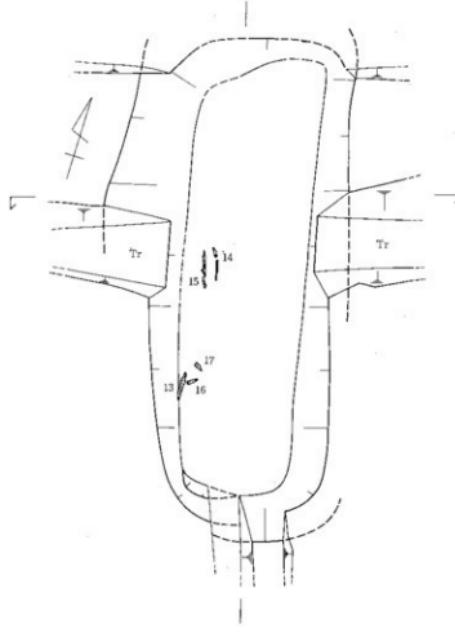
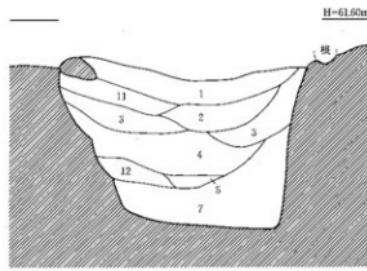
第25図 円護寺8号墳 墳丘遺存図



第26図 円護寺8・40号墳 墳丘断面実測図

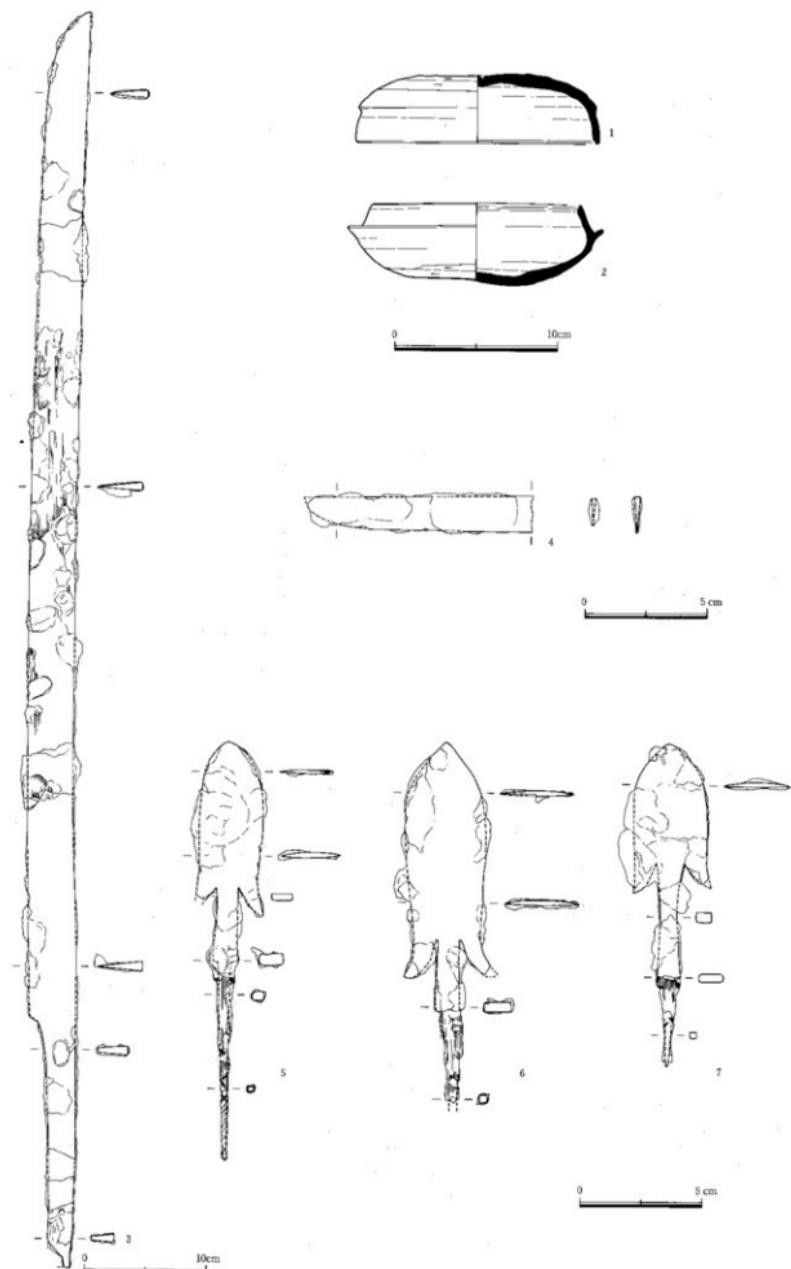


第27図 円覆寺8号墳 第1主体部実測図

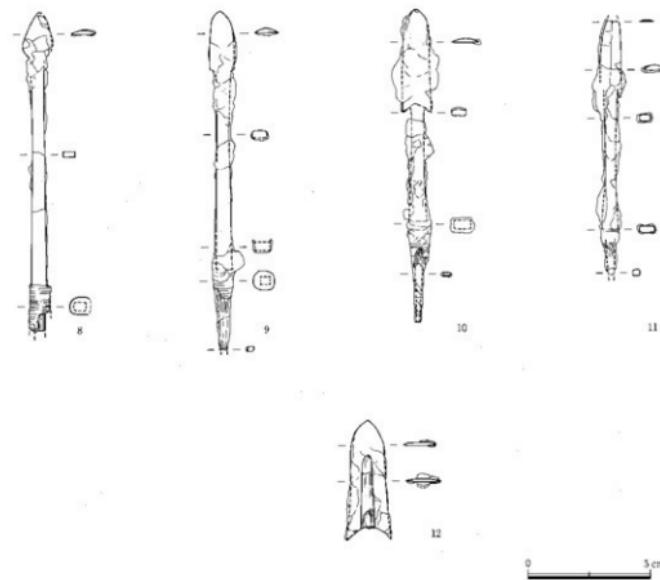


1. 明褐色粘質土 7SYR 4/6
2. 明褐色粘質土 7SYR 4/6  
(明褐色粘質土ブロック及び黄褐色粘質土ブロックを多く含む)
3. 明褐色粘質土 7SYR 5/6 (2よりやや明、明赤褐色粘質土ブロックを僅かに含む)
4. 明褐色粘質土 7SYR 5/6 (3よりやや暗、明赤褐色粘質土ブロックを僅かに含む)
5. 黄褐色粘質土 7SYR 4/6 (4よりやや明)
6. 黄褐色粘質土 7SYR 4/6 (7よりやや暗)
7. 黄褐色粘質土 7SYR 4/6
8. 明褐色粘質土 7SYR 5/6 (2よりやや明)
9. 黄褐色粘質土 7SYR 4/6 (6よりやや明)
10. 黄褐色粘質土 7SYR 4/6 (0・9よりやや暗、黄褐色粘質土ブロックを含む)
11. 明褐色粘質土 7SYR 5/6 (2よりやや暗、明赤褐色粘質土ブロックを僅かに含む)
12. 明褐色粘質土 7SYR 5/6 (5よりやや明)

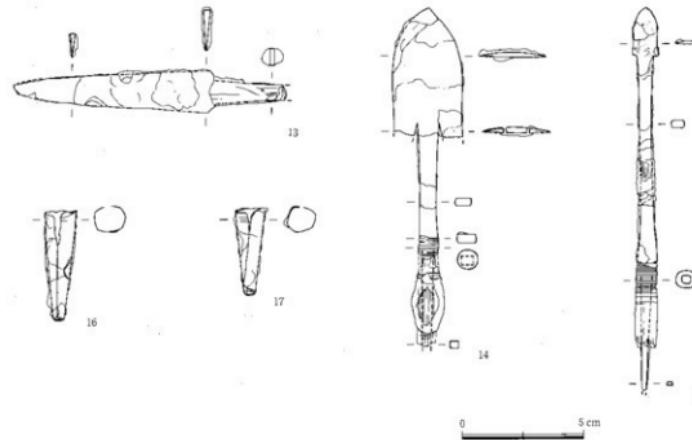
第28図 円護寺8号墳 第2主体部実測図



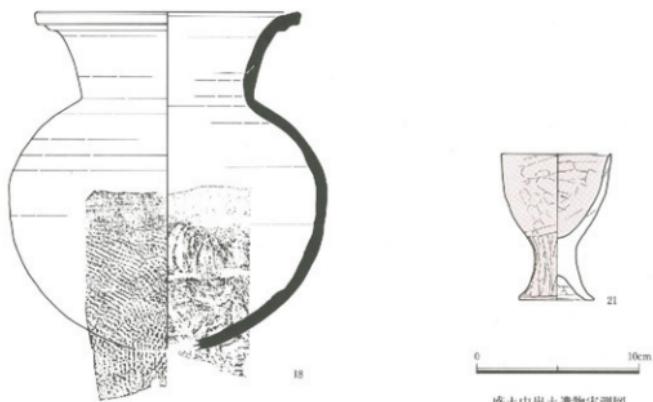
第29図 円護寺8号墳 第1主体部出土遺物実測図(1)



第30図 円護寺8号墳 第1主体部出土遺物実測図(2)

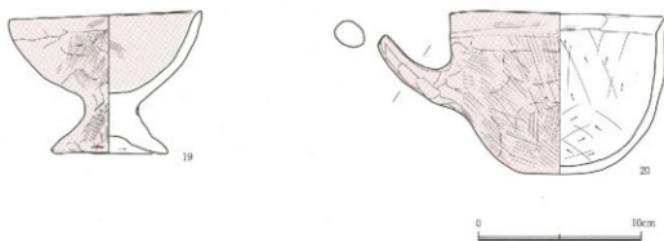


第31図 円護寺8号墳 第2主体部出土遺物実測図

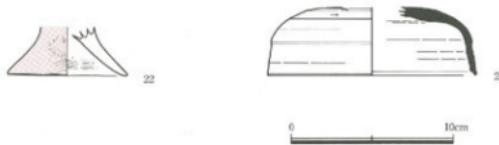


盛土中出土遺物実測図

墳頂部出土遺物実測図

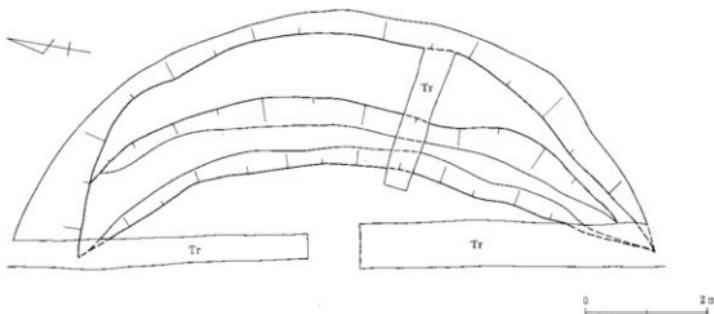


周溝内出土遺物実測図



表土中出土遺物実測図

第32図 円護寺8号墳 出土遺物実測図



第33図 溝状造構実測図

### 5 円護寺40号墳（第24・26・34～36図、図版13～15・23・24）

#### 位置と現状

8号墳の東側に位置している。調査前の観察では、8号墳の墳頂部につながる平坦な突出部が観察されたが、はっきりした古墳の形状は見られなかった。また、尾根の上位側には地山を掘削した状況が認められたが、これらは8号墳に伴う周溝の痕跡と判断され、単独の古墳が築かれていることは予想されなかった。

#### 墳丘

墳頂部は平坦部を有し、8号墳の墳頂部に比べわずかに高くなっている。墳丘規模は南北径6.5m、東西径4.2mを測り、楕円形に近い平面形を呈している。墳丘の高さは南周溝底から墳頂部まで0.8mあまりである。

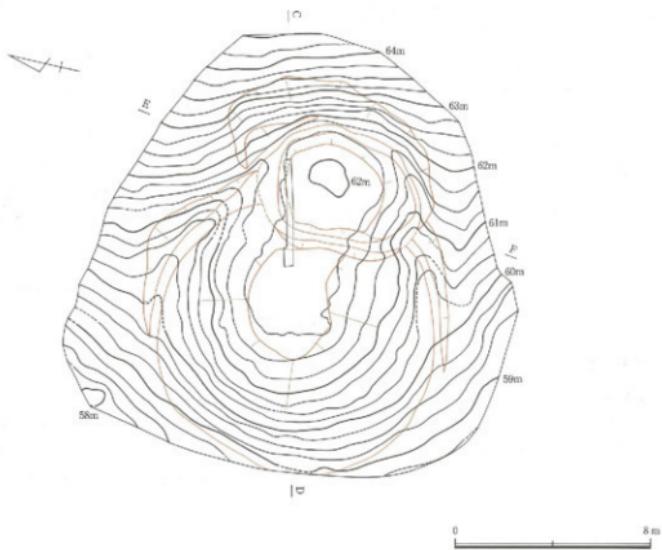
墳丘の築造は、周溝の掘削と盛土によって行われている。盛土は、8号墳の墳丘斜面から周溝部にみられ、中央部で厚さ1m前後を測る。第26図のC～D、E～F断面にみると64～75層と2～12層が盛土とみられ、8号墳の周溝部に盛土を行って墳丘を築いている。8号墳より後出の古墳であることがわかる。周溝は南側から東側ではっきり見られ、幅0.7m、深さ20cm程度で地山を掘削して廻らしている。第26図のC～D断面で見られる90層が周溝の埋土である。また、8号墳の墳頂部側にも幅75～110cm、深さ10cmあまりの周溝が廻っており、墓域を画している状況が認められる。

#### 埋葬施設（第36図、図版14・15・23・24）

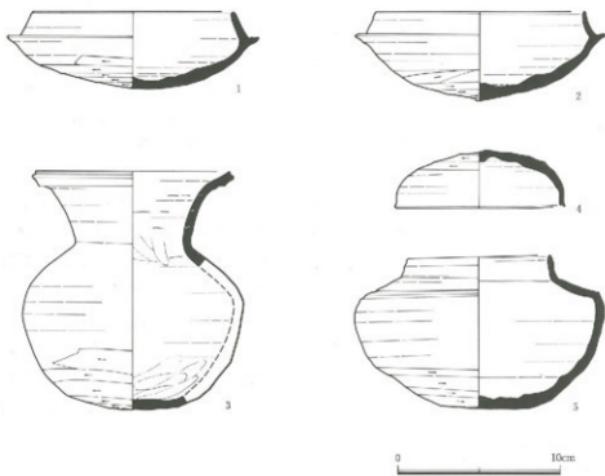
主体部は墳頂部中央からやや西側に位置し、墳丘面から約65cm下位の盛土内から墓壙1基が検出された。主軸はほぼ南北にとり、尾根の稜線には直交している。検出に苦慮し、墓壙の原況を失ったが、長さ250cm前後の隅丸長方形に近い平面形をなすものと推定される。墓壙幅は60cm、深さ61cmである。底面はおおむね平坦で、底面の検出長225cm、幅37～49cmを測る。埋葬形態は、墓壙埋土の状況や遺物の出土状態からみて、墓壙内に被葬者を直接埋葬していたものと思われる。

遺物は、墓壙底から須恵器の杯身（第35図1、2）、壺（3）、有蓋壺（4、5）が出土した。いずれも完形遺物である。（1）、（2）は墓壙底の南隅に位置し、伏せた状態で並べられている。出土位置や出土状況から枕として転用されていたものと考えられる。（3）、（4）、（5）は北側に位置し、（4）と（5）はセット状態で検出された。

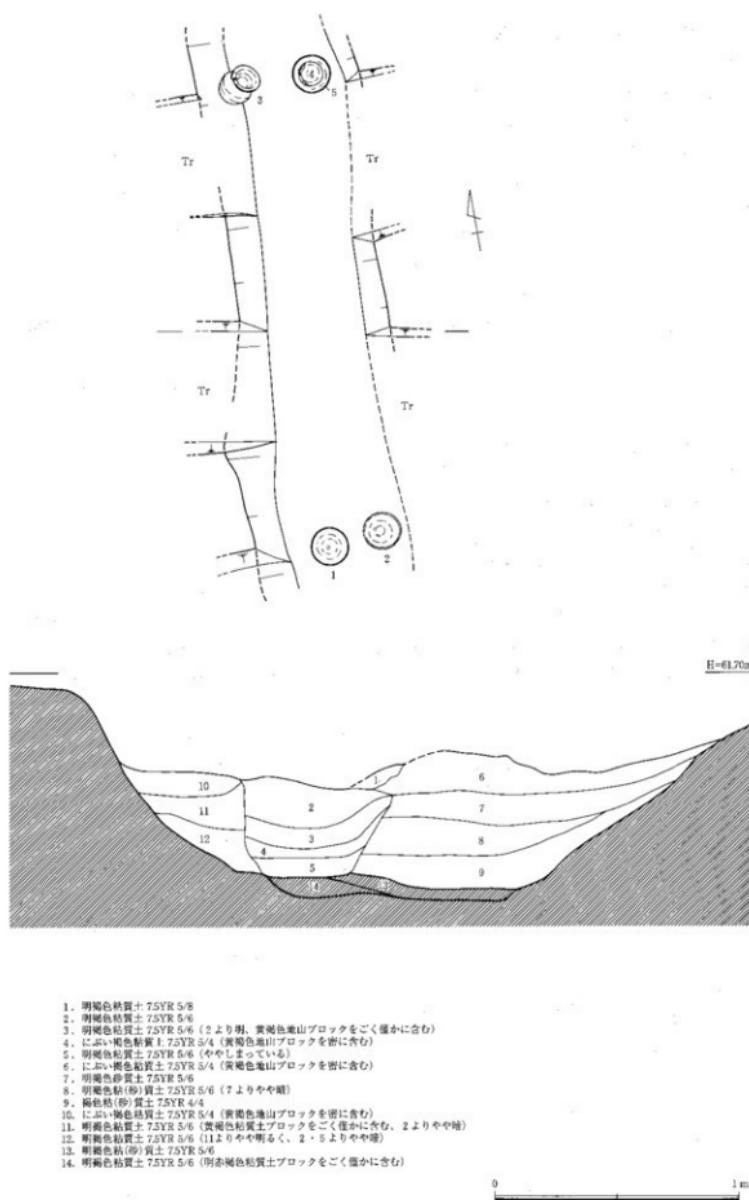
墳丘面や盛土中からは遺物は検出されなかった。



第34図 円護寺40号墳 墳丘遺存図



第35図 円護寺40号墳 主体部出土遺物実測図



第36図 円謹寺40号墳 主体部実測図

## 6 円護寺41号墳（第37～41図、図版15～17・24）

### 位置と現状

8号墳の上方約40mに位置し、標高68～70mの丘陵緩斜面に立地している。調査前の観察では、尾根の上位側に周溝の痕跡がわずかに認められたが、墳丘のはっきりした高まりは見られなかった。墳頂部についてもわずかな平坦部が残るもの、その遺存状態は悪くかなり削平を受けている状況が観察された。また、墳丘裾部は山道による削平や流失によって原状がかなり失われている様子がうかがわれた。

### 墳丘

厚さ10～15cmの表土下で墳丘面を検出した。墳頂部の標高は68.75mである。墳丘は南北径8.3m、東西径7.8mを測る円墳で、遺存高は西裾部から墳頂部まで1.8m、東側周溝底から0.4mを測る。

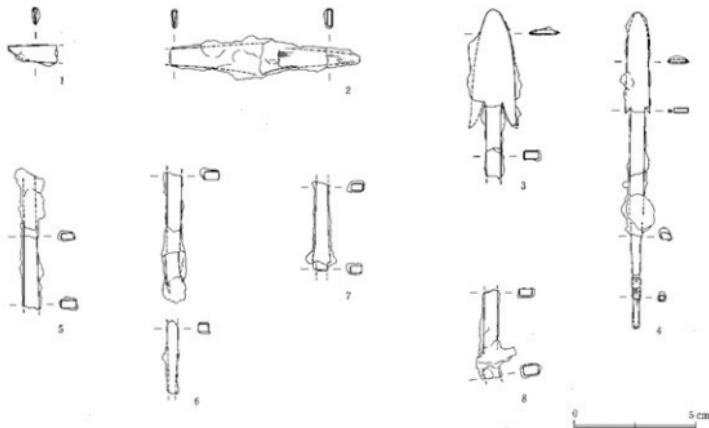
墳丘の築造は、尾根の上位側を廻る周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝は墳丘をほぼ2/3周し、東側で地山の掘削が大きく行われている。周溝の幅は東側で最大幅2.6m、周溝底から墳頂部での深さ0.4mを測る。盛土は最大で厚さ50cmあまりが遺存しており、墳丘断面第39図にみる2～12層が墳丘築造時に盛られた土と考えられる。断面観察から、丘陵斜面の傾斜変換地点を有効に利用して墳丘を築造している様子をうかがうことができる。

### 埋葬施設（第40図、図版16・17・24）

主体部は、表土下15cmの墳頂部ほぼ中央から石棺1基が検出された。石棺の蓋石はすべて失われており、石棺内は土砂でおおわれていた。また、石棺を構成する石材には原位置を失っているものもあり、石棺にも擾乱がおよんできている状況が見られた。

石棺は主軸を南北にとり、尾根の稜線には直交している。石棺規模は内法で長さ175cm、幅は北側小口55cm、南側小口側45cmである。深さは南側の小口側で43cmを測る。石棺の幅にはっきりした差異が認められ、幅が増す北側が頭位と推測される。石棺の組合せ方を見ると、まず両小口に比較的大型の扁平な石材を立て、この小口板を挟み込むように側石を配している。側石は5石使用されており、基部となる側石を設置したのちに石材を積上げて側壁を造っている。棺床には板石を敷き詰めていたものとみられるが、北小口側についてはすでに失われている。

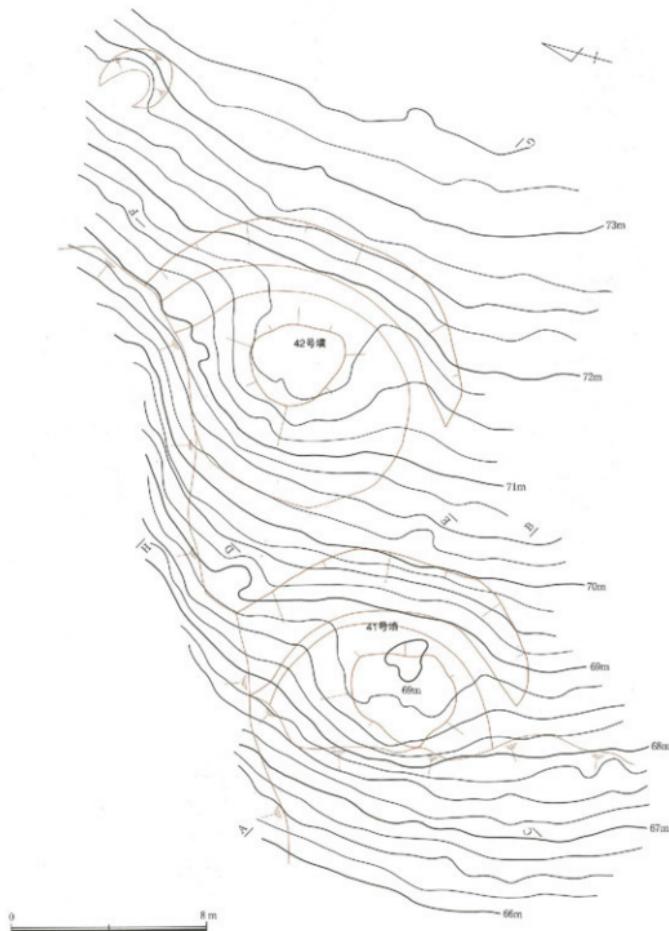
石棺を納めた墓壙は長さ247cm、幅118～138cm、深さ31cmを測り、北側で幅を増す隅丸長方形の平面形をなしている。墓壙底には小口および側板を設置するための溝状の掘り込みが行われている。



第37図 円護寺41号墳 主体部出土遺物実測図

遺物は刀子(第37図1、2)、鉄鎌(3～8)が出土した。いずれも棺床から7～15cmあまり浮いている。出土位置は北側にまとまる傾向が見られるものの、破損状態で検出されており、原位置を失っていると思われる。(1)は刀子の切先部、(2)は切先を欠いた刀子の茎部から刀身部である。(3)は平造の広根鎌で鎌身部に逆刺をもつ。(4)はほぼ完存し全長12.75cm、鎌身部の長さ4.13cmを測る。鎌身の形状は長三角形を呈し、片丸造でわずかな逆刺を有する。茎部には木質痕が認められた。(5、7、8)は鎌の頭部、(6)は鎌の頭部と茎部である。

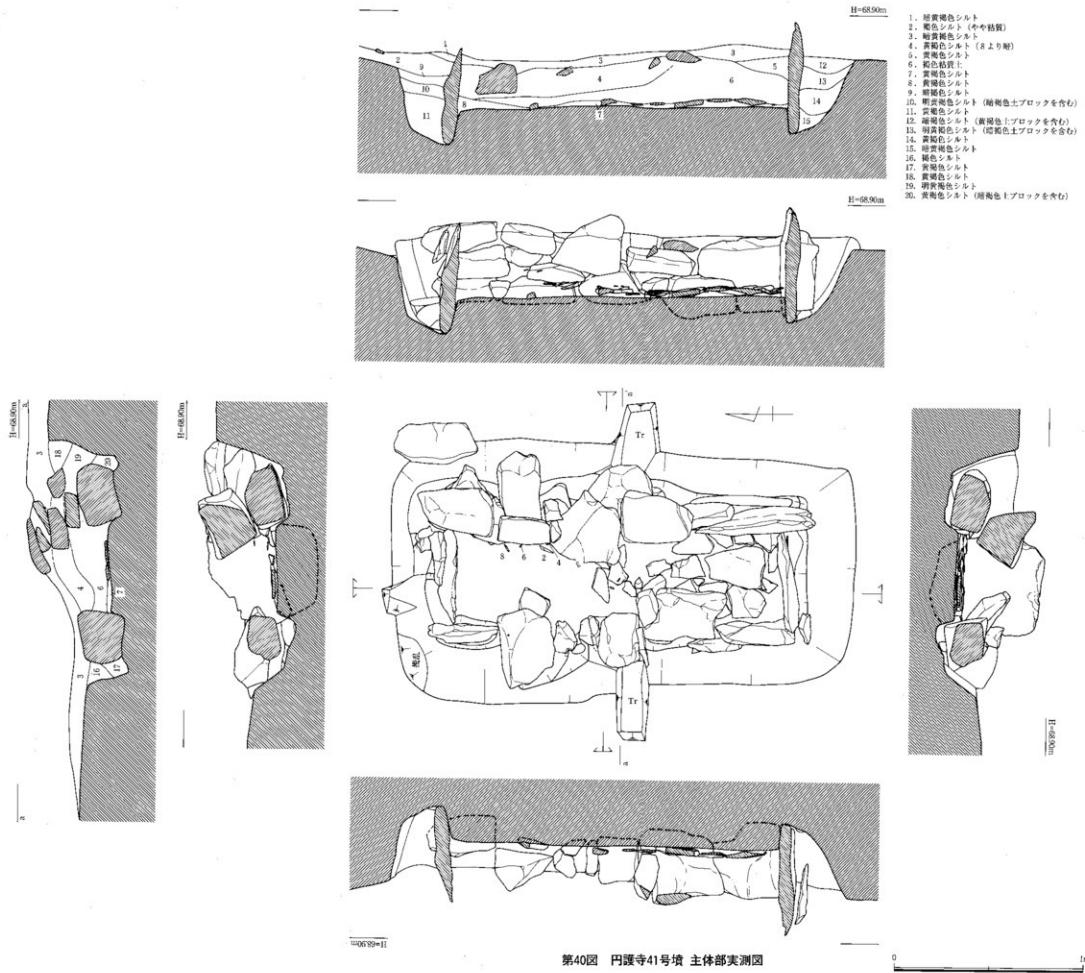
墳丘面や盛土中から遺物は検出されなかった。



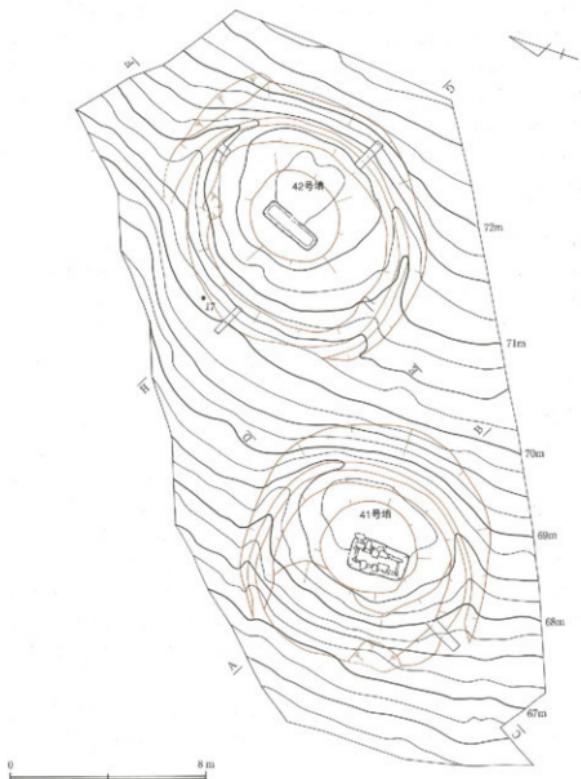
第38図 円護寺41・42号墳 地形実測図



第39図 円融寺41号墳 墓丘断面実測図



第40図 円蔵寺41号墳 主体部実測図



第41図 円護寺41・42号墳 墳丘遺存図

## 7 円護寺42号墳（第38・41～46図、図版17・18・24）

### 位置と現状

41号墳の上方約3.5mに隣接し、標高70.2～72.3mの緩斜面に立地している。すぐ北側には直径22mあまりを測り、円護寺古墳群中では最も大きな円墳2基（9、10号墳）が位置している。

調査前の観察では、尾根の上位側を廻る周溝が認められ、墳頂部に平坦部が見られた。墳丘裾部についても、北西側で一部削平された状況が見られたが、全体的に比較的良好な状態で墳丘が遺存している様子が観察された。

### 墳丘

厚さ15cm前後の表土下で墳丘面と埋没した周溝の痕跡を検出した。周溝部には厚さ20～40cmの埋土が堆積していた。墳頂部の標高は71.8mを測り、墳丘規模は南北方向で直径9.7m、東西で8.8m、墳丘遺存高は西裾部から1.8m、東側周溝底から約0.5mである。墳形は南北径が若干長い円墳である。

墳丘の築造は、尾根の上位側を廻る周溝の掘削と、盛土によって行われている。周溝は墳丘をほぼ2/3周し、西側はわずかな地山の削り出しによって墳裾部を造りだしている。周溝の幅は東側で最大2.0m、深さ0.4～0.6mを測る。盛土は墳頂部西側で最大厚40cmあまりが確認された。第43図にみる3～13、16層が盛土と考えられる。

### 埋葬施設（第42図、図版17・18・24）

主体部は、墳頂部中央から隅丸長方形を呈する墓壙1基が検出された。主軸はN-21°-Eにとり、尾根の稜線にはほぼ直交している。墓壙の上面規模は長さ252cm、幅68～70cm、底面長225cm、幅44cm前後を測る。深さは23cmである。墓壙の深さが非常に浅いが、墳丘断面にみる第2層の褐色土が墓壙上面に置かれた封土と考えられることから、墓壙の原況はおおむね保たれているものと思われる。

埋葬形態は、墓壙埋土の状況、鉄刀の出土位置や須恵器壺の出土状態からみて、墓壙内に被葬者を直接埋葬していたものと思われる。

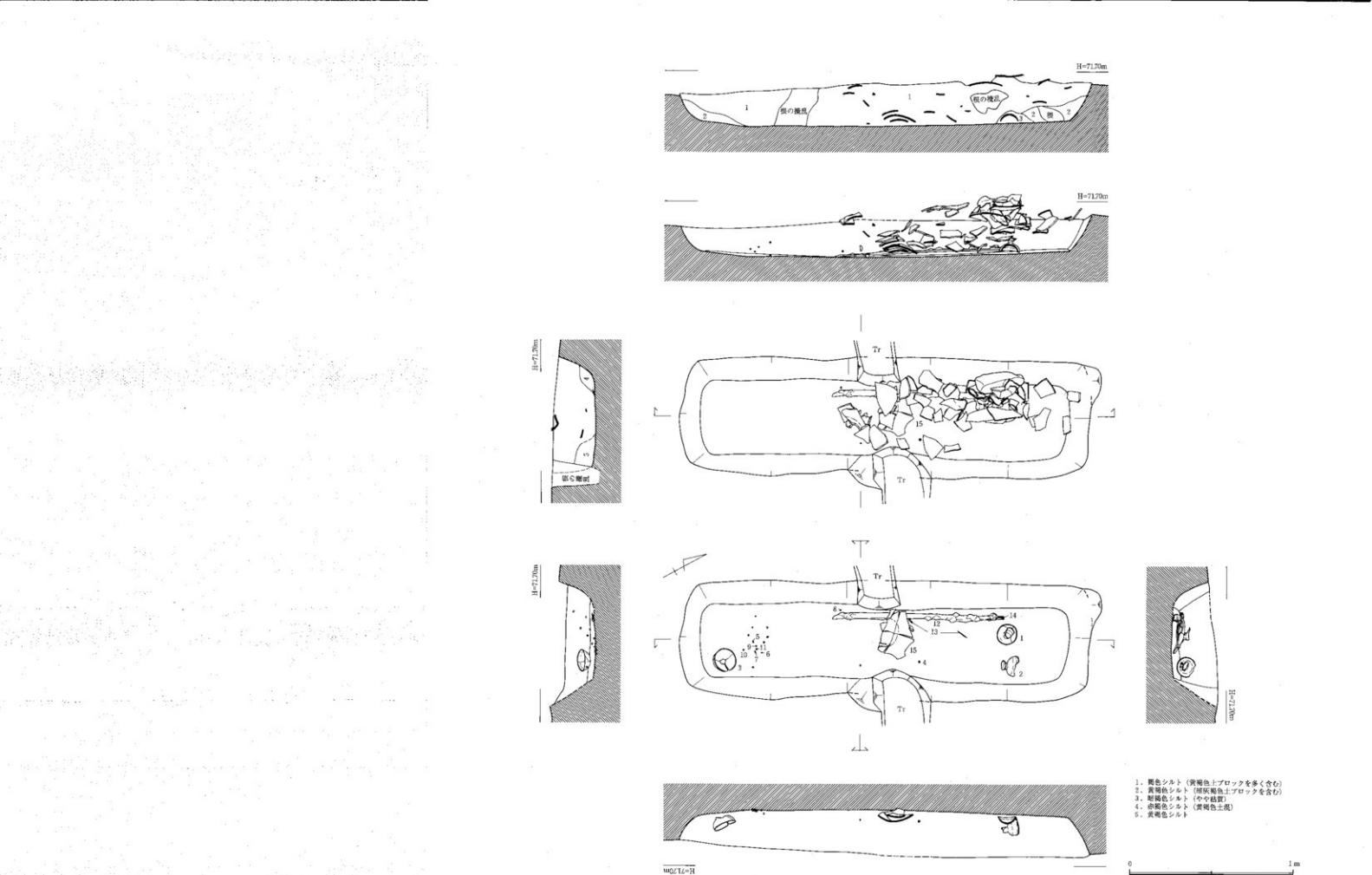
遺物は、土師器高杯（第44図1～3）、須恵器壺（第45図15）、切子玉（第44図4）、管玉（5）、小玉（6～11）、鉄刀（12）、鐵鎌（13、14）が出土した。

高杯はいずれも赤彩されている。（1）、（2）は墓壙底北東小口側から並列する状態で検出され、（3）は南西隅に位置している。（1）、（2）は出土状況から枕として転用されていた可能性を考えられる。須恵器壺（15）は破片状態で墓壙の北側からまとめて出土した。出土位置は墓壙底および埋土上面において、これらの出土状況からみて意図的に破碎し同時に墓壙内に埋められたものと判断される。鉄刀（12）は底面に接し西側の壁際から出土した。切先を南西側に向け、刃部は墓壙壁側に向いている。全長105.2cm、刀身中央部の幅3.9cmを測る大刀である。鐵鎌（14）は鉄刀茎部の上にほぼ接した状態で、（13）は刀身部から少しあなれた墓壙中央よりから破損した状態で検出された。（13）、（14）ともに逆刺を有し、（14）の鎌身部には布目の痕跡が二重に残っている。

玉類は、墓壙中央から検出された切子玉を除き、他は高杯（3）周辺にまとまり墓壙底面および底面から10cm程度浮いた状態で検出された。水晶製切子玉1、碧玉製管玉1、小玉19点を数える。小玉はいずれも濃青色を呈するガラス製である。

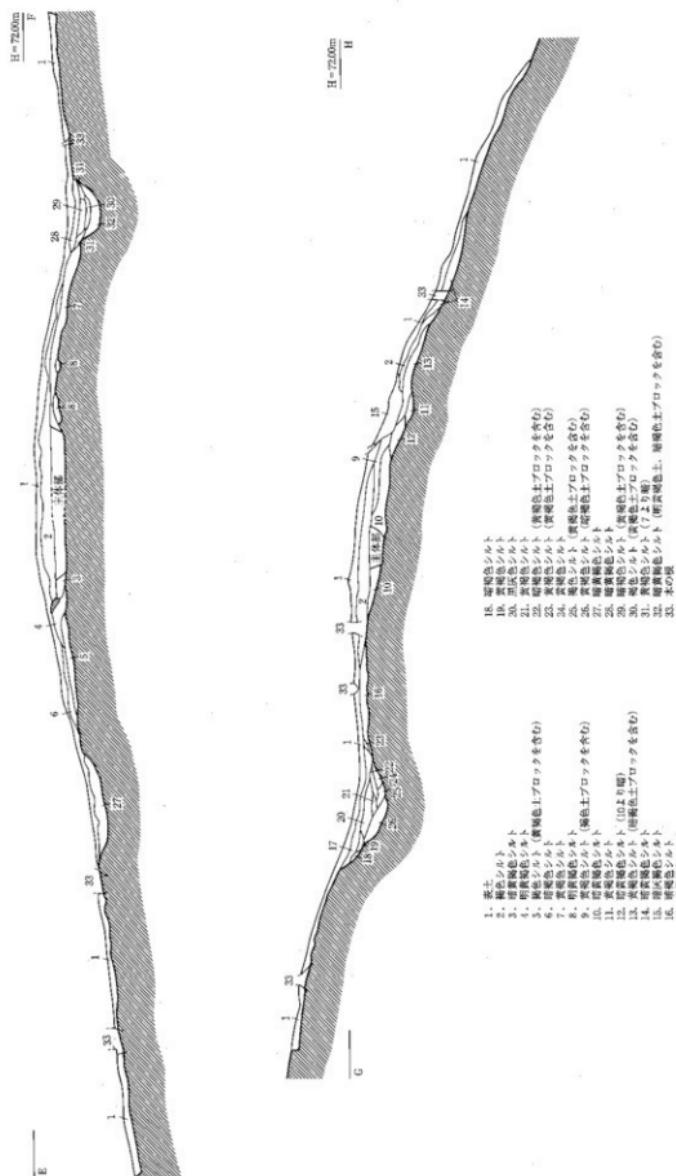
### その他の出土遺物

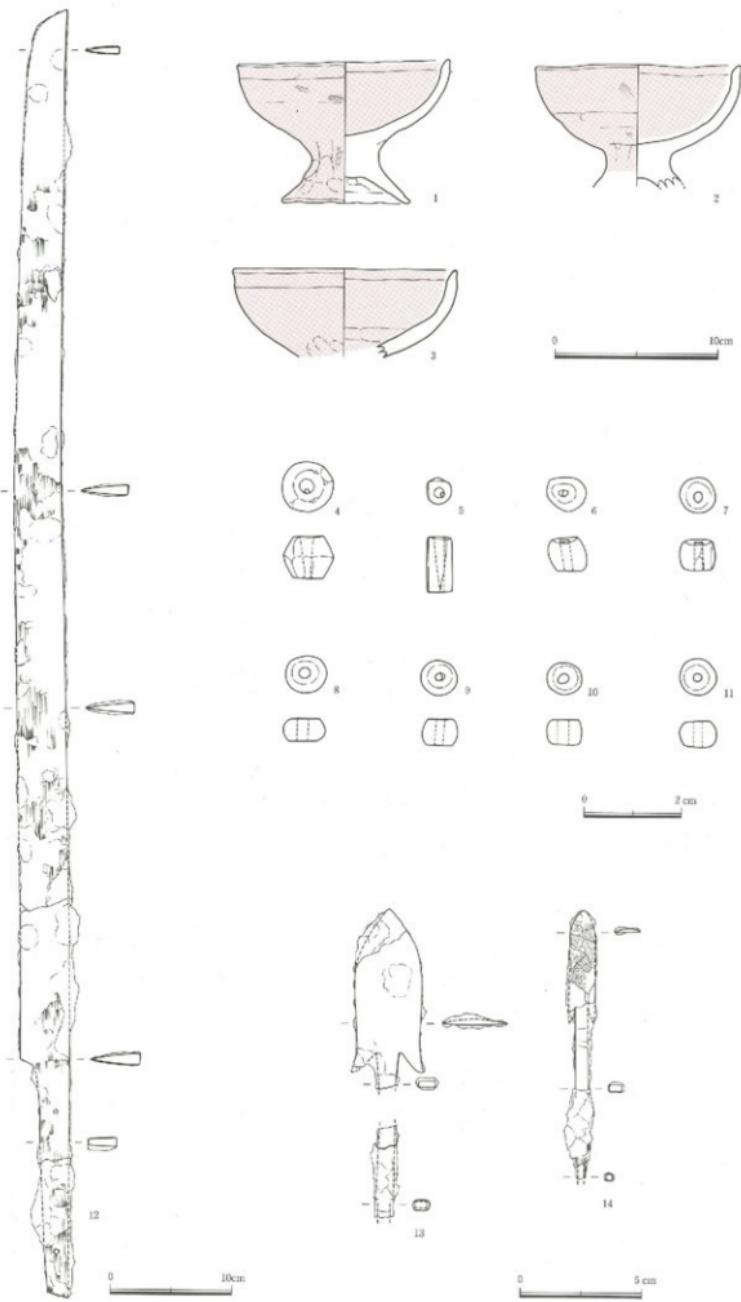
北西側の墳丘裾部から須恵器蓋杯の蓋（第46図16）、杯身（17）が出土した。（16）は1/8残存、（17）はほぼ完存する。（17）については墳裾に置かれた遺物の可能性も考えられる。



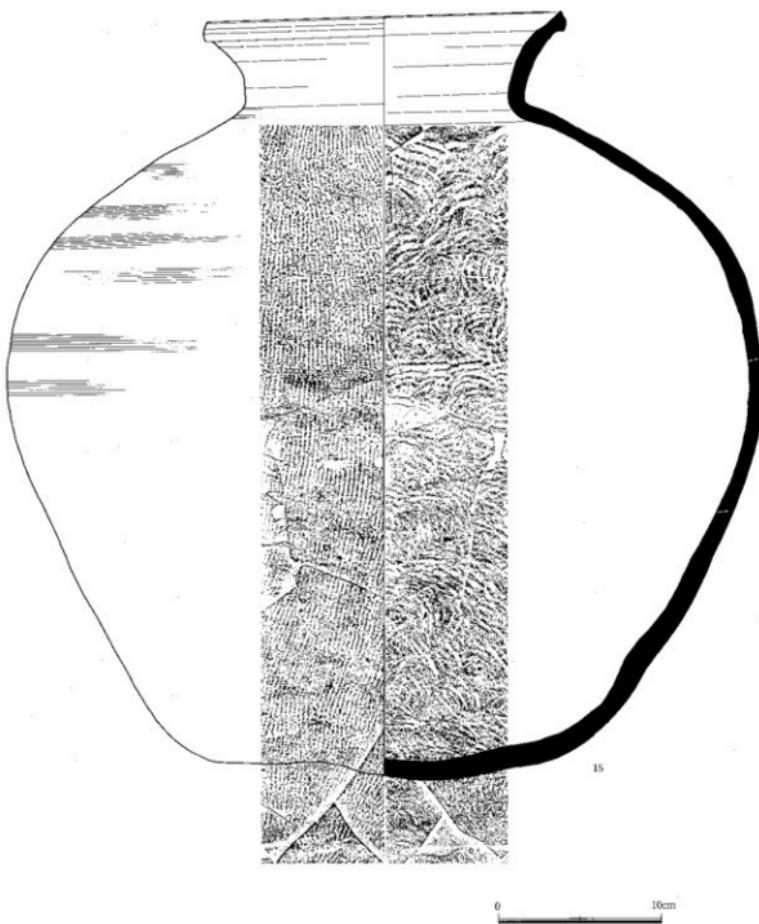
第42図 円護寺42号墳 主体部実測図

第43図 円融寺42号墳 墓丘断面実測図





第44図 円謹寺42号墳 主体部出土遺物実測図(1)



第45図 円護寺42号墳 主体部出土遺物実測図(2)



第46図 円護寺42号墳 出土遺物実測図

### 第3節 まとめ

今回の発掘調査は、道路整備事業に伴って実施された。調査地は、円護寺集落の東側丘陵上に位置し、調査対象は円護寺5~8、40~42号墳の計7基の古墳である。調査地の周辺には総数45基余りの古墳が確認されており、丘陵単位に支群をなしながら円護寺古墳群を構成している。古墳群の中には、前方後円墳とされている18号墳や、直径20mを超える9、10、19号墳が造営されているが、大半は直径13m以下の中円墳で占められている。

円護寺古墳群の調査は昭和57年度に初めて行われ、円護寺4、19、21~25、27~29号墳が発掘された。調査の結果、横穴式石室をもつ27号墳や、石棺を内部主体とする4、19、21、22、23号墳が検出され、6世紀前半から7世紀初頭に築造された古墳であることが明らかにされた。今回の調査対象となつた5~8、40~42号墳は、古墳群の南端にあたり、57年度調査地の南側に位置している。以下、調査結果の概要を述べまとめてみたい。

**立地** 調査を行なった7基の古墳は、本陣山(標高250m)から北西に延びる主稜線から西側に派生した支陵先端部の標高54~72mに立地している。先端頂部には円護寺古墳群中で最も大型の円墳となる9、10号墳(直径22m)が占地し、5、6、7号墳と8、40、41、42号墳はその下方の緩斜面に連続して築造されている。丘陵下の谷合には平野部が開けるが、各古墳はこの平野部を視野に入れて營まれている。

**墳丘** 7基の古墳はいずれも円墳である。規模的には5、7、8号墳が直径11.4m、13.6m、11.5mを測るが、他は径10m以下のに非常に小規模な古墳である。これらの中で、40号墳の墳丘規模は径6.5mと極端に小さく、立地的にも8号墳の周溝部に築かれていることなど、その特異性がうかがわれる。

墳丘の築造は、地山整形と盛土によって行われている。地山整形は各古墳に認められ、丘陵の上方側を大きく掘削して周溝部を廻らせ、墳形を造り出している。墳丘を全周する周溝はみられないが、5、7、42号墳の西側裾部は、地山を若干削り出すことによって墳丘基底部を明確にしている。

墳丘盛土も各古墳で見られ、厚さは40~150cmが確認された。緩斜面に形成された傾斜変換地点を選地し、多量の土を盛ることによって墳丘を築いている様子が見られる。中でも、8号墳には厚さ150cm前後の盛土が観察され、盛土を段階的に行い墳形を整えている様子が顕著に見られる。

**埋葬施設** 5、6、7、40、41、42号墳から1基、8号墳から2基の主体部を検出した。主体部は、いずれも墳頂部のほぼ中央に位置し、主軸は丘陵線に対しておおむね直交させている。

埋葬方法には箱式石棺、木棺直葬、直葬がみられる。石棺は5、6、41号墳から検出された。いずれも扁平な自然石を多用し、小口石を挟み込む箱形の形態をとっている。側壁の組み方にも共通性が見られ、5、6枚の石材を立て、その上部に小ぶりな石を小口積みにして壁面を整えている。同様の技法は、昭和57年度に調査された円護寺21号墳<sup>①</sup>にも見られ、円護寺古墳群にみられる石棺の特徴の一つといえそうである。

石棺規模は、6号墳石棺が長さ122cm、幅43cm、深さ33cm、41号墳石棺で長さ175cm、幅45~55cm、深さ43cmを測り、41号墳の石棺がおおむね標準的な大きさと考えられる。これに比べ、5号墳の石棺は長さ212cm、幅72~90cm、深さ78cmの非常に大型の石棺である。規模の差異がなにを示唆しているか特定はできないものの、5号墳石棺内における副葬品の多さや、その出土状況、出土須恵器に若干の時期差が見られることなどから二次埋葬が行われていたものと推測され、追葬を想定して大型の石棺を設定していた可能性も考えられる。市域における大型の箱式石棺の例として、鳥取市海蔵寺に所在した海蔵寺3号墳<sup>②</sup>(長さ189cm、幅64cm、深さ85cm)、4号墳<sup>③</sup>(長さ200cm、幅72cm、深さ70cm)や、開地谷6号墳<sup>④</sup>(長さ215cm、幅88cm、深さ94cm)などが知られているが、これらはいずれも大型の板石を用いた石棺で5号墳とは様相が異なる。

木棺直葬と考えられる主体部は7号墳から検出された。墓壙埋土の状況から、隅丸長方形の墓壙内には中央に、長さ204cm、幅40cm前後の木棺が安置されていたものと考えられる。直葬とみられる主体部

は、8号墳の第1、第2主体部および40、42号墳の主体部から確認した。それぞれの墓壙規模は、長さ207~277cm、幅60~97cm、深さ23~69cmを測り、比較的小規模な墓壙をもっている。特に、墓壙底の幅37~50cmあまりと非常に狭い点が特徴的である。この墓壙底には副葬品として須恵器、土師器、鉄製品、玉類が納められていた。その出土状況を見ると、8号墳第1主体部、42号墳主体部で検出された大刀は、いずれも墓壙壁の直下に納められている。また、42号墳主体部には、墓壙底から上面まで同一個体の須恵器壺が破片状態で出土し、埋葬時に壙して埋置したことを示唆している。

検出した8基の埋葬施設の中で、5、6、40、42号墳、8号墳第1主体部から土器枕が検出された。42号墳主体部には土師器高杯を、他は須恵器蓋杯を枕として転用している。被葬者の頭位は、42号墳が北東側に、他はいずれも南東であることがわかる。

**出土遺物** 遺物は埋葬施設、墳丘、周溝から検出されている。埋葬施設内に副葬されている遺物には須恵器、土師器などの土器類のほか、鉄製品や玉類がある。各古墳ごとにみると、5号墳主体部から須恵器蓋杯、長頸壺、瓶、提瓶、刀子、鉄鎌、土製丸玉、ガラス製小玉、軽石など総数44点余りの遺物が出土している。他の主体部に比べて点数、種類ともに勝り、出土した須恵器蓋杯には若干の時期差が認められる。副葬品の出土状況にも、石棺壁際に寄せ集積された一群や、埋葬時の原況をそのままに保つ群など、石棺内で二次埋葬が行われていた可能性を示唆する出土状況がみられる。また、セットで出土した須恵器蓋杯の中に人骨片が納められていたことなどからも、追葬を行っていたことが予想される。この他、6号墳主体部で須恵器蓋杯、8号墳主体部から須恵器蓋杯、鉄刀、刀子、鉄鎌、40号墳主体部から須恵器杯身、壺、42号墳主体部から土師器高杯、須恵器壺、鉄刀、鉄鎌、水晶製切子玉、碧玉製管玉、ガラス小玉が検出された。この中で、8号墳第1主体部と42号墳主体部に副葬されていた鉄刀はそれぞれ全長102.6cm、105.2cmを測る大刀である。市域で全長1mを超える鉄刀は、紙子谷36号墳<sup>(4)</sup>や古海37号墳<sup>(5)</sup>で出土しているが、類例も少なく注目される遺物といえる。

墳丘盛土から出土した遺物として、5号墳の須恵器杯蓋、7号墳の須恵器杯身、8号墳の土師器高杯がある。良好な状態で遺存していることから、いずれも原位置を保っているものとみられ、出土状況からも墳丘築造時に意図的に埋置されたものと推測される。また、5号墳墳頂部から須恵器高杯が1点出土している。高杯は埋葬施設の上位に位置し、出土状況から石棺を覆ったのちに供獻された遺物と考えられる。

**築造時期** 最後に7基の古墳について出土した須恵器の年代観から築造時期を簡単に記しておきたい。7基の古墳は、陶邑MT15~TK209<sup>(6)</sup>の範疇に入るとみられ、6世紀前半から7世紀初頭の造営とみられる。古墳別には、8、42号墳が6世紀前半、6、7、40号墳は6世紀中頃、5号墳が6世紀後半~7世紀初頭と考えられる。41号墳については時期を特定できる遺物もなく不明確であるが、8、42号墳との位置関係や、6号墳石棺と類似する点などから6世紀中頃の築造とみて大過ないものと思われる。

昭和57年度に行われた円護寺古墳群の調査結果からも、6世紀前半から7世紀前半の古墳が多く報告されている。今回の調査でも時期的には同様の結果が得られ、6世紀代になって、多数の古墳が小地域の中に造営されていったことが明らかになった。古墳が造営されている丘陵下には円護寺坂ノ下遺跡<sup>(7)</sup>が展開している。同遺跡で検出された同時期の集落跡との関連性がおおいに考えられるが、今後の課題として注意していくべき。

## 註

- (1) 財団法人 烏取県教育文化財団『円護寺遺跡群』1983年
- (2) 烏取市遺跡調査団が1985年調査
- (3) 烏取市『新修鳥取市史 第1 古代・中世篇』1983年
- (4) 財団法人 烏取県教育振興会『古海古墳群・墓園遺跡』1993年
- (5) 田迎昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (6) 財団法人 烏取県教育福祉振興会『円護寺坂ノ下遺跡』2000年

## 円護寺古墳群調査一覧表

名 称	墳丘		埋葬器		棺規模		墓 壁		方 位		埋葬施設		出 土 遺 物		時 期
	形状	規模(m)	主体部	埋葬方法	長さ×幅×深さ(cm)	平面形	長さ×幅×深さ(cm)	—	N-33°-W	須恵器 蓋杯	長頸壺	埴丘・周溝	その他		
円護寺 5号墳	円 直徑 高さ	11.4 3.2	1	石棺	212×90×78	—	—	—	—	須恵器 蓋杯	高杯	埴丘	蓋杯	古墳時代後期	
円護寺 6号墳	円 直徑 高さ	7.3 1.8	1	石棺	122×43×33	隅丸 長方形	105×101×49	N-24°-W	須恵器 蓋杯	刀子 鉄鏃	提瓶	舞部	銅鏡	古墳時代後期	
円護寺 7号墳	円 直徑 高さ	13.6 3.0	1	木棺直葬	(204×40×—)	隅丸 長方形	350×120×63	N-33°-W	須恵器 蓋杯	刀子 小玉 銀石	—	—	—	古墳時代後期	
円護寺 8号墳	円 直徑 高さ	11.5 3.2	第1 主体部 第2 主体部	直葬	—	隅丸 長方形	(277×74×51)	N-16°-W	須恵器 蓋杯	刀子 錐鐵	—	—	須恵器 蓋杯	古墳時代後期	
円護寺 40号墳	円 直徑 高さ	8.3 0.8	1	直葬	—	隅丸 長方形	(207×97×69)	N-16°-W	須恵器 蓋杯	刀子 錐鐵 不明鉄製品	土師器 把手付碗	—	須恵器 蓋杯	古墳時代後期	
円護寺 41号墳	円 直徑 高さ	8.3 1.8	1	石棺	175×55×43	隅丸 長方形	(250×60×61)	南北	須恵器 蓋杯	刀子 錐鐵	有蓋盞	—	須恵器 蓋杯	古墳時代後期	
円護寺 42号墳	円 直徑 高さ	9.7 1.8	1	直葬	—	隅丸 長方形	247×138×31	南北	刀子 錐鐵	—	—	切子玉 管玉 小玉	須恵器 蓋杯	古墳時代後期	

( ) 潛在・推定